

産総研協力次世代電池開発へ 京大に研究拠点設立

産業技術総合研究所（産総研、茨城県）と京都大は10日、次世代の蓄電池や低コストの燃料電池の開発を目的とする研究拠点を京大（京都市左京区）に設立したと発表した。新規材料の創出などの基礎研究に実績のある京大と、それを活用した装置づくりの技術を持つ産総研が互いの強みを生かす。

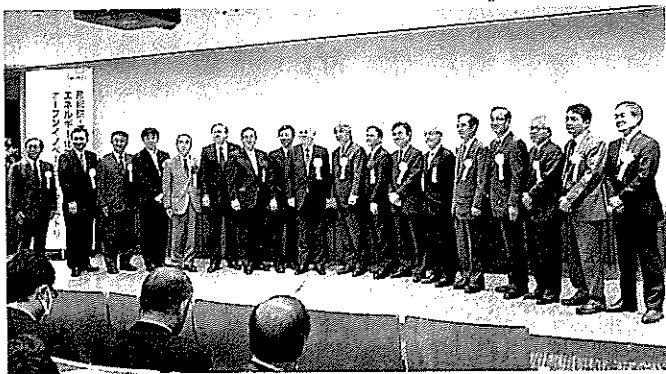


産業技術総合研究所と京都大が設立した研究拠点の開所式（京都市左京区・京大）

産総研は基礎研究の実用化を目的に全国の大学に研究拠点を設けており、京大が7カ所目。新設の「産総研・京大エネルギー化学材料オープンイノベーションラボラトリ」には、ラボ長に徐強・産総研首席研究員、研究顧問に北川進・京大高等研究院教授が就任した。両研究機関から研究者や大学院生が参加。京大の持つ多孔性材料や触媒の開発技術を生かし、企業とも協力して次世代の電池の製品化を目指す。設置日は4月1日付で研究期間は5年。10日に京大で開かれた開所式には、両機関の関係者やリチウムイオン電池を開発した吉野彰・旭化成顧問が出席した。副ラボ長を務める北川宏京大理学研究所

教授は「欧米では大学に国の研究機関や企業の研究拠点があるのは普通だが、日本は遅れている。技術開発と産業利用の間にある距離を縮めたい」と話している。（松尾浩道）

技術の種と社会の需要結ぶ 産総研と京大が研究所開所式



国立研究開発法人「産業技術総合研究所」（茨城県つくば市、略称・産総研）と京都大は10日、産業への応用を目指す研究所の開所式を拠点となる京都大吉田キャンパス（京都市左京区）の国際科学イノベーション棟で行った。開所式には、産総研の徐強・首席研究員が就任。3班集体で研究に臨む。CHEM-OIL は、京大の基礎研究を産総研の実用化技術と融

合。電気自動車や携帯電話など暮らしに必要となるリチウムイオン電池の改良や燃料電池の低コスト化など、新たな技術開発を目指す。

式で産総研の中鉢良治理事長は「黄金のパスを次々と繰り出し、日本経済を活性化させたい」と述べ、京大の山極寿一学長は「強みの相乗効果で世界最高水準の研究を展開したい」と抱負を語った。リチウムイオン電池を開発した吉野彰・旭化成顧問も来賓としてあいさつし、「（技術の）シーズ（種）と（社会の）ニーズをつなげるのはジェットコースターに乗って針の穴に糸を通すほど難しい作業。だからこそチャレンジする価値がある」とエールを送った。

【野口由紀】